

菅公の「海ならずたゝへる水」の歌の解

岡田 希雄

一

菅公が筑紫の配所にて、衷情をもらすために詠まれた「海ならずたゝへるイタゞよふ水の底までも清き心は月ぞ照らさむ」と云ふ歌は、歌としては別段に優れて居るとは思はれないが、詠まれた事情が事情であるのと、新古今集雑下や大鏡時平傳にも見え、殊に大鏡では此の菅公の條は大ていの教科書式抄本にも採録せられて居るので、此の歌は割合に有名であるのだが、其の歌の意味に成ると、判つて居るやうであり乍ら、案外にもはつきりとは判らず、新古今や大鏡の註釋類を見ても明確な解釋を施して居るものは、自分の查べた範囲内では、全く見受けないのである。しかして自分も明確な意味が取れないので、教室で解

釋するに際しても、諸註の説によりて、ごまかして居たのであるが、漸く妥當であらうと認める解釋を、古人により教へられたので、例により遼家とは思へど、其れを紹介敷衍して見るのである。

二

さて此の歌の第二句は、新古今集にはタゝヘル水ノとあるが、大鏡ではタゞヨフ水ノと成つて居るものもある。しかし其れは大體は流布本系統の本であり（従うて大鏡の註釋類は大體タゞヨフによりて解して居るやうだ）、古本系統のものでは新古今と同じである。此の方が勢力あるものと云ひ得る。しかして言葉としては水がタゞヨフと云ふのは、用例は無い事は無いが妥當であるとは思はれない。や

はりタ、ヘル水とあつて然るべきである。(近衛家所蔵の一古本に初句が「う羅ならず」「假名草」とあるのは、浦ナラズのつもりであるらしいが、無論誤寫であると見る可きであらう)

ところで此の歌では、此海ナラズタ、ヘル水若しくはタゞヨフ水の意味がはつきりせないから、一首の意も完全には理解できなくなるのである。

先づ落合直文・小中村義象兩氏の大鏡詳解を検すると、タゞヨフ水を探り、タゞヨフ水に就いての解は無いが「海はその底まで、月の照らすは勿論なれども、海でなくても清き水ならば、その水のたゞよふいさゝかの處までも、月はてらすとなり」と解し、池邊義象・松本龍之助・佐藤球氏らの大鏡諸註何れもタゞヨフ水に従ひ、解釋も落合氏本と同じである。池邊氏の註にはタゞヨフ水に關し「流人の身を比せむが爲に、殊更に、たゞよふ水とはいへり。水は、常に動きて止まざるものなればなり」と云ふ註をも添へて居る。新しいものでは、雄山閣の國語國文學講座所收石川佐久太郎氏の註釋に「海のやうな廣々した水でなくても……

……大海のやうに廣々としてゐなくて、狭く搖いでゐる水であつても、その水さへ清ければ、水底までも月は照り通すであらう」とありて、水の面積が問題とせられて居る。が何れも「海で無くても清き水」、海以外のあらむ限の水、と云ふのが如何なる水を意味するのであるかは、明示して居ないから推定致しかねるが、此の文言から常識的に解釋すれば、海以外の水であつて、陸上に存する川池沼澤湖等の類の水の義であるらしい事は、容易に想像できる。

一方、タ、ヘル水とある新古今集の註では、八代集抄は「海其外の水底も清き所は月の照すなれば……」と云ひ(此の解は大鏡諸註の解の根源であらう)、鹽井正男氏の新古今集詳解は「我が心は海にはあらざる意なり。海は其の底までも月の照らすといふ考へを以て、海にはあらずとも、我が心は月の照らさんとの心にて、いへるなり……海は其の底までも月の照らすは、勿論なれども、海でなくても、此の深く底までも清き水の如き我が清き心は、必ず此の月は照覽するならむといふ事にて、識者の爲めに冤罪を被りて左遷の身となれるが、此の潔白なる心は、日月は照覽せら

れてあらんといふ事を、月あかき夜の折りからのけしきにつけて、言はれしものなり。大鏡には、二の句をたゞよふ水のとしたり。大鏡の方、其の流罪の境遇にかけあひて面白く、且つ調もよしと思ふ。」と解し、鴻巣盛廣氏の遠鏡は「海へ底迄モ月ガ照ラスモノダガ、海デナクテモ、丁度湛ヘタ水ガ底マデモ澄ミ渡ツテキルヤウナ清イ私ノ心ハ月ガ照シテ下サルダラウ。日月モ私ノ潔白ヲ御存ジデセウ」と云ふのであるから鹽井氏の説と全く同じである。此の解釋は、も少し云ひかへると「海ぢや無いが、海のやうに底までも清い自分の心、其の心を月は照覧なさるだらう」と云ふ事に成るのだらう。

とにかく斯くの如く二説があつて大鏡の註釋と新古今の註釋とでは全然異つて居るのである。

即ち、も一度判りやすく云へば、

(甲) 海以外の例へば川池沼湖等の清い水（八代集抄、大鏡諸註）

(乙) 海では無いが海の如く清き自分の心（鹽井、鴻巣兩氏）

と云ふ相異が存する。但しタゞヨフ・ダ、ヘルは此の場合問題とはならぬ

しかし此の二種の解釋、果して正しいであらうか。

三

先づ海ナラズタ、ヘル水の文法的解釋であるが、是れには二種の解釋が可能である。一つは海ナラズをばタ、ヘルに、副詞的修飾語としてかゝるものと見るのであつて、完全に云へば「海ならずしてたゝへる水」であり、口語にうつすと「海ヂャナクテタ、ヘテ居ル水」の義、云ひかへれば「海以外のものであつて、湛へて居る水」の義である。も一つは「海ならず」を水にかゝる形容詞的修飾語が、並置のために中止形を取つたと見るのであつて、要するに「海ならぬ水」でありしかも「たゝへる水」であるから、口譯では「海ヂャ無ウテ湛ヘテ居ル水」と云ふ可く、此の二種の解釋は何れが正しいとは斷言できないが、結局は兩者ともに水の説明であり（しかして其の水は、海以外のものである點に於いて一致して居る。表現は異つても指すものは同じである）心の説明で、無い事に於いては一致するのである。

故に此の解釋のみに就いて云へば、「海でなくても清き水ならば」と云つて居るのは、云ひ足らぬけれども、誤があるとは云はれない。しかし其の「海でなくても清き水」

をば、陸上の水に擬して居ると見る、他無き點に於いて缺點がある。(何故其れがいけないかの理由は後で述べる)

ところで鹽井氏の解は「我が心は海にはあらざる意」と云つて居られるのであるが、此の言と、歌全體の解釋とを結びつけて考へると、氏は「海ならず」は「清き心」の「清き」にかゝる副詞的修飾語と見て居られるか、若しくは「たゝへる水の底までも清き」にかゝる副詞的修飾語と見て居られるかの何れかであると考へられるのであり、口譯すれば「海ぢや無いが海のやうに心底までも清い自分の心、其の心を月は照覽なさるだらう」と云ふ事に成るやうだが、此の解釋は妥當であるとは思はれぬ。蓋し此の歌では「海ならずたゝへる水の」までが「底までも清き」の序と成つて居るのだと見る可きであり、文法上は「海ならず」は今説いたやうに直ぐ下の「たゝへる」にかゝるものと考へるが妥當であると思はれるからである。要するに鹽井氏が「我が心は海にはあらざる意」と云つて居るのは根本的に間違つて居ると思ふ。

四

菅公の「海ならずたゝへる水」の歌の解

そも／＼此の歌で菅公が述べんとせられた事は、云ふまでも無く「底の底までも清き我が心を、人は知らずして其の爲めに、自分を冤罪に陥れたけれど、月のみは照らして清き心底をみそなはすらむ」と云ふ事であつて、「清き心」が眼目であり、其の清き心を「清し」と云ふ語に引かれて、常套的に清澄な水に譬へられたものである。がさらに「底までも」の語のある事によりて、清さの程度を深さで示す事も眼目と成つて居るのである事を見逃してはならぬ。(水の清澄度は今の科學に於いても透明度板の深度により示す他は無いのである)しかして「深さ」を持ち出したからには、深さに於いて劣つて居るものを舉げたところで其れは全く無意味であるのだから、無論、出來るだけ深さに於いて優つて居るものを舉げなければならぬ。ところで海と云ふものは、父恩高_ニ於山_ニ母德深_ニ於海_ニ(童子數、また弘誓深如_ニ海_ニ(普聞品偈)と云ふ風に、觀念的にあらゆる水よりも深いものとせられて居るのである。然るに此の歌に於いては、其の深い海を舉げては居るが、其の海を否定して「海ならずたゝへる水」即ち海に非る別種の水を持ち出し

て居るのである。海ぐらゐの深さでは、まだ／＼不足である
と云ふので、海以外の水を持ち出したのである。此の場合の「海に非る別種の水」が、深さに於いて海の程度で無く
海よりもさらに／＼深い水で無ければならぬ事は極めて
明らかである。しかし海以外の水としては陸上に池・沼・
澤・淵・湖などの類、さては水溜りの如きもあり、其れらに
は清澄なものもあるけれども、深さに於いては海と比較に
成らぬものであるから「海ならずたゝへる水」が、陸上の水
の事では無いのは、説明を要せぬ。

従うて大鏡の註釋書の類が「海でなくても清き水ならば
」と云ひて、清さのみを説き、全く深さに言及して居ず
剩つさへ「その水のたゞよふいさゝかの處までも」と云ひ
て、寧ろ清き水でさへあらば、どんな水溜りの如きものでさ
へも其の隅から隅までもと云はんとして居るが如き口吻
であるのが妥當で無い事は明言し得ると思ふ。とにかく大
鏡諸註が清さのみを問題とし、深さを忘れたのは是れも根
本的な誤謬である。鹽井氏は「たゝへるは水一杯に満ち
たる形にて、水の深きさまなり。深くして底までも清くす

みたる水のさまなり」と云ひて深さも注意して居られるが
「たゝふ」其のものには深さを意味する程度は乏しいと思
ふ。なほ「海ならず」の解に誤解がある事は既述の通りで
ある。(氏は、大鏡に「たゞよふ水」とある方が、流罪の菅
公にふさはしいと見て居られるが、「たゞよふ」とあるの
は大鏡の流布本の方であるから、古本の「たゝへる」を探る
べきである。)

五

さて斯く解釋して來ると、大鏡の諸註の解も、新古今集
の註釋の解も正しくは無い事が云ひ得るのであり、たゞ
「海ならずたゝへる水」が海以外の水であつて、しかも海よ
りも深さに於いて優れて居る水の事である事が斷言でき
るのであるが、其の海以外の水で、しかも海よりも深い水
が何か特定のことを指すとすれば、其が何であるかは自分
も示すことは出来ないのである。しかして人間は觀念上は
種々の事を考へる事が出来る。例へば、數に關しては一分
と云ふ長さを百億分したものをさらに百億分した長さを
漠然と考へる事が出来る。其の反對に、百億里の百億倍も

考へ得る。時間的に於いても同様である。觀念の遊戲に長じて居た印度人は「非算數所知亦非心力所及」の大數を考へて、大袈裟に無量無邊五百千萬億那由陀阿僧祇を常套語として使用し、時間的には芥子劫、磐石劫などを考へた。現在では天文學に於いては何萬光年など云ふ距離が平氣で考へられて居るのである。故に「海ならずたゝへる水」も單に「海以外のもの、海よりも、さらに深い水」を漫然と考へた上で、斯く詠まれたのであり、別に是れと云つて、具體的な水を指すのでは無いと考へる事も可能であるが、しかし假りに何らかの具體的なものを指したとすれば其の指されたものは何であると見る可きか。

自分には此の水の事は以前は不明であつたのだが弘安頃の塵袋を見るに及んで、納得が出来たのである。塵袋第七卷勝寫版本一三ウ古に、此の水に關する解が見えるのである。抄録すると

……コレニ海ナラズタ、フル水ニアルハ何ニ水ツ心ハ如何。○希云、タ、フル水では二段活で他動詞と成る、こゝは自動詞だから四段活としてタ、ヘルで無ければならぬ池水、澤水ナドニハ非ス水輪際マデモトヨマセ給ヘルナルベシ、海コソハ衆水ノ王ト思ヘドモ、其レヲナキ

菅公の「海ならずたゝへる水」の歌の解

ラヒ弁ラル、上ハヨノツネノ水、モチキガタシ、海
水猶ヲタザル故ニ水ヲセトム竟、海ナラデハ水輪コソ
尚ヲタチマサリタラメト覺ル也、水輪ノ底マデモト云ハ
マ心モ深く大水ノ至極ナレバ、コトキハマリテキコユ、
月ソラモノツネノ空ノ月ニハ非ズ、冥ノ照覽ヲ月ニタトフレ
バ、地際金輪ヲヘダテ、爭カ不レ照ラ云難ニアルベカラ
ズ、底マデモトツマケタルコトバニカタキ事ヲタメシ
トスル心アラハレヌ……照覽ノ月ヲ心地ノ水輪ニウツシ
テ、底ノ清キヲ顯サシハコトカタキ難、更ニアルマジクヤ
トゾ覺ユル、歌仙達ノ會尺ハイカバアルラン不レ知ラ、
是ハタマワタクシニ心エタルオモムキヲ書ツクルバカ
リナリ、サダメテ僻韻歟

と云ふのである。月の事はさて置き水のところを敷衍すると、「此の歌で、菅公が衆水の王たる海をば、海ナラズタ、ヘル水と云ふ風に無視輕視せられて居るのを見ると、心を深くして、水輪の事を云つて居られるのだと解したい」と云ふのである。

佛説に據ると、聳立する須彌山を中心に八山八海が水平的に存し、(其の八海の一番外の鹹海中に四箇の大洲たる

須彌四洲が存し、其の四洲の一たる南瞻部洲が吾人の住する此の世界である。此の九山八海は其の下部に立體的に存する金輪・水輪・風輪の三輪で支へられて居り、其の金輪の厚さ三億二萬由旬、水輪は金輪よりも厚くて厚さ八億由旬と云ふ。南瞻部洲は一邊が三由旬半、他は二千由旬だと云ふから水輪の厚さ推して知る可きである。さて斯う云ふ水輪を塵袋は持ち出したのである。如何にも海ナラズタ、ヘル水であり、深さに於いては海とは比較に成る可くも無い。菅公が斯う云ふ水輪を意識しつゝ海ナラズ云々と詠まれたと見る事は、いかにも有りさうな事である。

菅公は儒者ではあつたが、當時の智識階級人としては、佛教は常識であつた筈である。菅公が水輪を下に踏みて詠まれたと見るのは有り得べき事である。(水輪際と云ふ語は現今行はれないが、「金輪際」はなほ生命のある事を思ふと、水輪や金輪が常識であつた時代もあつたのである。)方四十里の磐石を、天人が輕き天衣で一拂し、其のために磐石が消磨しつくされる年數をば拂石劫又は磐石劫と云ふが、拾遺集賀の讀人不知「君が代は天の羽衣まれに來

て撫づとも盡きぬ巖なるらん」は作者が佛家であつたか何うかは不明だが、其の磐石劫の譬喩によつて君が代を壽いで居るのである。又方四十里の城中に芥子を充滿せしめ、其れを長壽の諸天が三年に一度來りて一粒づゝ運びさる場合に、其の芥子が盡きる年數を芥子劫と云ふ。仁明天皇の四十の寶算を賀し奉るため、興福寺の大法師らの奉獻した長歌には、芥子劫と磐石劫との兩方を詠み込んで居る。

菅公の「海ならずたゝへる水」の歌も、同じやうに佛説を含めたものと見るのが妥當であらうと思ふ。要するに此の歌は、「海では無くて、深くく、水を湛へて居る水輪の水、其の底までも清澄であり、月光が底までも届くのだが、自分の心も、奥の奥まで清いのである、此の清き心を人はいさ知らず、月のみは照覽し給ふであらう」と云ふ意であらうと思ふ。つまり、鹽井氏の解は感心できず、語句の解釋としては大鏡諸註の解で可いのであるが、諸註が海以外の水として、水輪を考へ得なかつた點が不完全であつたのである。

以上、塵袋所見の水輪説を妥當であると認めて紹介したが、別種の解釋を考へて居る人もあるかも知れないと思ふ。教示を願ひたく思ふ。